

# 日本におけるキリスト教宣教の歴史的考察II

黒川知文

Tomobumi KUROKAWA

社会科教育講座

## 第2章 明治時代における宣教

1853年、ペリーが浦賀に来航して、250年にわたる鎖国は終わった。1858年に結ばれた日米修好通商条約により、在日米国人に、キリスト教礼拝が許可された。プロテスタントの宣教師や信徒が、活動し始めた。徳川幕府が倒れても、禁教令は継続され、長崎では、キリシタンに対する迫害が行われた。しかし、諸外国の圧迫により、明治政府は、1873年に禁教令を撤廃した。

その結果、キリスト教宣教が活発に行われるようになった。

一方、キリスト教主義学校も、全国に設置された。

1870年設立のフェリス女学院をはじめとして、女子学院、同志社、梅花学園など36校が、1880年代までに宣教師や日本人信徒によって、創立された。しかし、明治中期になると、国家主義の台頭により、1899年に文部省訓令が出され、政府に公認された学校における礼拝や宗教教育が禁止されるようになった。

このように、キリスト教主義学校の宣教活動が禁止されたこと、また、学校教育を受けられる子弟が上層階級に限られていたこと、などからキリスト教主義学校が民衆に与えた影響は弱かった。そのため、本章では扱わない。本章では、カトリック教会、正教会、プロテスタントの明治における宣教活動を検討する<sup>(1)</sup>。

### 第1節 復活キリシタンの信仰

1858年、日仏条約が締結された。翌年にはジラール(1821~1867年)が日本教区長として江戸に赴任した。以後、布教を目的とする宣教師が数多く日本にやって来た。ジラールは、江戸と神奈川において、メルメ・ド・カシュン(1828~1871年)は函館において、フェレ(1816~1900年)は長崎において活動した。そして1861年には横浜に、1865年には長崎に天主堂が建設された。

プティジャン(1829~1884年)は、二代目日本教区長であった。彼の管轄時に、「キリシタンの復活」があった。

1865年3月17日、長崎において大浦天主堂の献堂式が行われていた時に、隠れキリシタンが、そこを、訪れ、信仰を表明したのであった。この事件は「キリシタンの復活」と呼ばれる。しかし、当時はまだ禁教令

が撤廃されていなかったために、キリシタンたちは当局による弾圧にあった。「浦上崩れ」、「大村崩れ」、「五島崩れ」と呼ばれるのがそれである。キリシタン農民は寺とは断絶され、自ら埋葬しなければならなくなった。

1868年、御前会議において、浦上村の農民すべてが流罪になることが決定された。3384人のキリシタン農民は、他の藩に預けられることになった。彼らは、萩や津和野や福山などの藩に移送された。これは「旅」と呼ばれた。以後、1873年にキリシタン禁制の高札が撤廃されるまで、彼らは獄につながれ拷問を受けた。死者613人、改宗者1011人、信仰保持者1092人であり、改宗者は、のちに信仰にもどった(表1参照)。彼らは村に戻っても家と田畑は没収されており、貧困状況の中、赤痢の流行や台風の災害に見舞われたが、信仰を保った。

明治時代のカトリック教会の布教は、迫害を耐えた「復活キリシタン」の働きが、その原動力であったと言えよう。

#### A. 宣教の方法

##### 1. 貧民救済活動

この時代、宣教師が貧民救済活動を宣教の一環として展開した。

プティジャンの下にあったド＝ロ(1848~1914年)は司祭として、貧民救済活動にあたった。また、印刷事業として多くの信仰本を出版し、建築家として出津教会や大野教会を建て、医者として赤痢患者の隔離施設を建設して治療した。さらに、新しい農業技術を導入し、ソーメン、マカロニ、パンなどの製法技術をも導入した。

岩永マキ(1849~1920年)は、1870年、「旅」で岡山藩に流され、苦役に服し、3年後に浦上に戻った。1874年に、台風と赤痢、また天然痘が浦上を襲った時にド＝ロの救援活動を助けた。孤児院を設立し、共同生活をして貧民救済にあたった。さらに、浦上十字会を創設し、紡績、農耕、養蚕を奨励し、保育所も設立した。

##### 2. 巡回宣教

この時期に採用された宣教方法が、巡回宣教であった。

これは、伝道師が太鼓をたたいて路地で集会を通知し、集会においては、幻灯でわかりやすく教義を説き、

表1 流配人員移動表

合	鹿 児 島	高 知	松 山	高 松	徳 島	山 口	岡 山	福 山	広 島	津 和 野	松 江	鳥 取	姫 路	和 歌 山	富 山	郡 山	(大和古市) (伊賀上野) (伊勢本木)	津 藩	名 古 屋	大 聖 寺	金 沢	藩 名	
	七七・〇	二四・二	一五・〇	一一・〇	二五・七	三六・九	三二・五	一一・〇	四二・六	四・三	一八・六	三三・五	一五・〇	五五・五	一〇・〇	一五・一		三三・三	六一・九	一〇・〇	一〇・二〇	(明治二年 の榎高年 単位万石)	
計	島津忠義	山内豊範	久松勝成	松平頼聡	蜂須賀茂詔	毛利元徳	池田章政	阿部正桓	浅野長勲	亀井茲監	松平定保	池田慶徳	酒井忠邦	徳川茂承	前田利同	柳沢保申	藤堂高猷	徳川慶勝	前田利督	前田慶寧		の明治二年 藩主	
	鹿児島	高知	石愛鉄媛	名東	山口	岡山	小田	広島	浜田	島根	鳥取	飾磨	和歌山	新川	奈良	大和古市	伊賀上野 伊勢本木	愛知	石川		の明治六年 県名		
三三九四	三七五	一一六	八六	五一	一一一	三〇一	一一七	九七	一七七	一五三	八八	二六三	四八	二八一	四二	八六	二二三	三七五	四四	五二六		預人員	
(六二二)	一三	六	一	(二)	(五)	五	五	二	九	九	五	二	一	二	四	一	一	(三)	一四	五九		生児	
(六二二)	五三	三九	八	(五)	(三)	三九	一七	六	三九	三九	八	四五	八	九五	五	四	二	(二)	七二	一〇三		死亡	
一〇一一	四四	〇	〇	〇	〇	一六二	五七	三	一〇八	五六	八五	九六	二五	一四三	〇	〇	〇	二	一九六	三四		復明治五年 籍	
一一	七	〇	〇	〇	〇	〇	三	一	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	同籍	
一四	〇	〇	〇	〇	〇	三	〇	二	〇	〇	〇	〇	三	〇	〇	〇	〇	二	二	二		脱走	
一九〇〇	二八四	八三	七九	四二	一一二	一〇二	四五	八七	三九	六七	〇	二四	一六	五二	四一	一〇五	四九	七三	一九	四八一		明治六年 帰籍者	
			六・四・二	六・四・二八	六・四・一〇	六・四・二二	六・三・二九	六・四・二九	六・四・二六				六・四・一九	六・四・二	六・四・三		六・六・二五	六・四・二五		四・二六	六・四・七	年月日発	
	六・四・二二	六・八・七	六・五・二二	六・五・二六	六・四・三二	六・五・七	六・四・一九	六・四・一六	六・五・九			六・五・二三		六・四・七	六・五・二八	六・五・三〇	六・七・二四	六・五・二一	六・四・二八	" 八・一五	" 六・一〇	六・六・七 (四九八)	年浦上 月掃着 日着

片岡弥吉『日本キリシタン殉教史』時事通信社、1979年、626~627頁。

その後、宣教師が説教をするものである。

集会は天幕集会の形態をとり、集会のあとには、個人的に宣教師が伝道した。宣教師は、特に社会の最下層に生きる民衆に伝道した。

3. 修道会の自由な活動

1891年に教階制が導入された。これは教会の組織化を意味する。東京に大司教を置き、その下に長崎と大阪と函館の司教、その下に、各地の司祭を置いた。

このような組織化とともに、様々な修道会がそれぞれの目的を掲げて活動した。

1872年には、サンモール会が設立され、孤児救済、診療、幼児教育にあたった。双葉高校は、この会が設立した。

1877年には、幼きイエズス会が設立され、教育と貧

民と病人の救済にあたった。神戸に孤児院と診療所を、また、大阪に養育院、長崎に聖ベルナルド病院と無料の小学校を開いた。

1877年には、男子からなるマリア会が組織され、青少年教育にあたった。暁星学校の前身である。また、同年において、函館にトラピスト会が設置された。この会は、祈りと黙想と労働の生活を通して、農耕や酪農の発展に貢献した。

1910年には、聖心会が設立され、女子教育に従事した。聖心女子学院は、この会から生まれた。(表2参照)

B. 宣教の結果

この時期に、プロテスタントは中産階級を中心に信徒を獲得したが、カトリックは社会の中下層部に支持者を広げていった。

表2 来日修道会年度別一覧

来日年度	男子修道会	女子修道会	来日年度	男子修道会	女子修道会
1872	0	1①	1935	2	2
77	0	1②	36	0	1
78	0	1③	37	0	3
84	0	1④	41	0	1
88	1⑤	0	44	0	1
96	1⑥	0	47	1	1
97	0	1	48	10	6
1904	1	0	49	4	6
07	3	0	50	3	4
08	1	2	51	8	7
20	0	2	52	4	2
21	0	1	53	3	2
24	0	1	54	2	5
25	0	2	55	0	2
26	1	1	56	1	2
28	1	2	57	0	2
29	0	1	58	1	3
30	1	0	59	0	5
31	1	1	60	0	1
32	1	1	65	0	1
33	1	3	67	0	2
34	1	4	70	1	1

①サンモール会, ②幼きイエズス会, ③シャルトル聖パウロ修道女会,  
④カトリック愛苦会, ⑤マリア会, ⑥トラビスト会  
笠原一男編『日本宗教史II』山川出版社, 1977年, 274頁。

## 第2節 ニコライと正教の宣教

1859年, マヤホフが函館ロシア領事館付司祭として赴任したが, 病気のために帰国した。その代わりに1861年にニコライ (1836~1926年) が日本に来た。

ニコライの本名はイオアン・デミトリチ・カサーツキンで, ロシアのスモレンスクに生まれた。父親は村の司祭であり, 母親は, ニコライが5歳の時に他界した。

神学校を首席で卒業し, さらに, 1857年にはロシア随一のペテルブルク神学大学に進んだ。そこにおいて地理, 歴史, 物理学, 哲学, 論理学, 宗教哲学, 比較神学などを広く学んだ。特に, 比較神学においては, ロシア正教以外の神学も学んだ。語学に関しては, ギリシア語, ラテン語, ドイツ語, フランス語, 英語を習得した。

在学中, ニコライは, ゴロウニンの著書『日本幽囚記』を読み, 日本伝道を決心した。

1860年に大学を卒業して, 「勝利者」という意味のニコライに改名して修道士になった。輔祭に任命されて, 1861年, 25歳の時に日本に派遣された。

### A. 宣教の方法

#### ①文書伝道

ニコライが来日した時, 日本において禁教令はまだ解かれていなかった。そこでニコライは, 禁教令が解かれるまでの7年間, 日本の文化と宗教の研究に従事

表3 明治期におけるハリストス正教会の強勢

年 度	教 会	神 品	伝教者	信 徒	受洗人
明治24	219	29	136	20,048	1,738
25	219	28	161	20,915	1,137
26	219	28	160	21,712	1,019
27	220	29	168	22,273	811
28	225	31	170	22,867	954
29	225	34	166	23,514	936
30	226	37	151	24,260	1,011
31	231	35	161	24,924	953
32	254	36	162	25,698	1,110
33	259	38	154	26,310	909
34	260	41	145	27,245	1,214
35	260	40	149	27,960	1,031
36	260	39	155	28,397	720
37	260	39	153	28,746	653
38	264	40	169	29,289	801
39	265	40	141	29,973	929
40	265	41	123	30,432	781
41	265	42	122	31,175	1,037
42	265	41	121	31,984	1,099

笠原一男編『日本宗教史II』283頁。

した。

彼は, 古事記, 日本史書紀, 大日本史を読み, 仏教も研究した。また, 聖書の日本語翻訳もおこなった。

1868年には, 日本宣教にそなえて, 『伝道規則』を著した。これは, 14条からなる教理である。

また, 信仰書も多く翻訳した。『東方宗鑑』と『正教会要課』は正教のカテキズムであり, 『日誦経文』は祈りを内容としていた。

日本語による聖書や信仰書が出版されたことは, 画期的なことであり, 日本人は, 直接, 福音に接することができるようになったことを意味する。

#### ②集会伝道方式

正教の宣教は, 神学校である伝教学校や詠隊学校において学び, 訓練された教職者である伝教師を中心として, 展開された。伝道集会は, 週2回, 講義所と呼ばれる場所において開かれた。

この集会は, 2部より構成されており, 1部は, ニカヤ信条と主の祈りと十戒の学びであり, 2部は, 新約聖書の講義であった。講義のあとには, 議論の時間がもうけられていた。

集会においては, 男女の差はなかった。もし欠席者がいれば, 伝教師がその家を訪ねて, そこで教えた。また, 信徒は伝教師とともに, 毎日, 町中に行って人々を集会に誘った。

このような講義所は, 1877年には263個所にも及んだ。

#### ③地方中心

正教会による宣教活動は, 北海道に始まり, 東北地方, 関東地方へと展開した。そして, 都市部よりも農村部の, とりわけ没落した富裕階級に信徒を獲得する

のに成功した。

#### B. 宣教の結果

明治初期から中期にかけて、正教会による宣教活動は、著しい成功をおさめた。平均して、1000人をこえる人々が洗礼を受けた。(表3を参照)

しかし、1914年に日露戦争が開始されると、正教会は敵国ロシアの宗教だとみなされ、国民の反感を導き出し、その結果、宣教活動は停滞した。

さらに、1917年にロシア革命が勃発し、ロマノフ王朝が崩壊すると、本国ロシアからの日本の正教会に対する資金援助が途絶えた。さらに、日本国内に、共産主義に対する弾圧が強まるにつれて、正教会も敵視されるようになった。

このような時代状況において、大正時代には正教会による宣教は後退を余儀なくされた。

### 第3節 プロテスタントの宣教

#### A. 宣教師の働き

1846年に、イギリス人宣教師 B.J. ベッテルハイム(1811~1870年)が琉球地方を伝道し、また、福音書の翻訳もした。

日米和親条約と日米修好通商条約が、1854年と1856年に締結されて、米国から宣教師が来日した。1859年に聖公会の J. リギンズ(1829~1912年)と C.M. ウィリアムズ(1829~1910年)が来日し、1863年に長崎に礼拝堂を建設した。1859年の秋には、米国長老教会の J.C. ヘボン(1815~1911年)と米国オランダ改革派の S.R. ブラウン(1810~1880年)、D.B. シモンズ(1834~1889年)が神奈川に居住した。C.F. フルベッキ(1830~1898年)は長崎に居住した。1861年には J. H. バラ(1832~1920年)が横浜に居住した。また、米国バプテスト教会からは、J. ゴーブル(1827~1896年)が1860年に、米国会衆派教会からは、D.C. グリーン(1843~1913年)が1869年に来日した。

これらの宣教師は、1873年に禁教令が廃止されるまで、公的にキリスト教を宣べ伝えることはできなかったが、廃止されるやいなや、熱心に宣教した。この時期の宣教方法について、ヘボンを例として検討する。

#### 1. 宣教の方法

##### ①集会伝道方式

ヘボンは、ペンシルヴァニアに生まれ、プリンストン大学で MA を取得し、ペンシルヴァニア大学医学部に学んだ。卒業後、医療伝道を志し、中国宣教師になった。そして、シンガポールやアモイにて活動した。この間、夫人が病気に倒れ、子供も失った。4年後には、帰国して、ニューヨークで医院を開いた。医院は成功した。そして、12年後に、今度は自費で日本宣教をすることを長老教会外国伝道局に申し出た。

1859年、45歳の時にヘボンは来日した。日本は幕末の尊皇攘夷の時代であった。外国人は危険な状況に

あった。実際、英学塾を開いた夫人は暴漢に襲われた。

ヘボンは、集会を開いて、日本人に英語を教えながら伝道した。ヘボン塾は、青年教育を目的とし、男女共学であった。この塾からは、植村正久、島田三郎、本多庸一などが輩出された。

ヘボンは、さらに病人の治療もした。貴賤の別なく治療し、貧者は無料であった。以下のヘボンの書簡には、日本伝道の感想が書かれている。

日本国民のように、何世紀にもわたって幽暗の中に横たわり、死の陰にすわっていた国民に、朝の光がその上に照りそめる光景をまのあたりに見るまでに至ったという。このような宣教の使命に選ばれたということは、何と光栄極まりないことではありませんか。かつてわたしが、この未知の国に向かって行こうとして、ニューヨークでの富と楽しみと栄達とのあらゆる望みを振り捨てたときに、多くの人々は、わたしを愚かものだとあざ笑いました。けれどもわたしは一時たりとも、そのことを後悔したことはありません。これに対して主の約束は、わたしの場合には、満たされてなお余りあります。主は実にわたしに対して恵み深く、親切であり、またいつくしみ深くありました。ですからわたしは主の助けによって死ぬまで主に仕えてきたのです。こうした奉仕のうちに年老いて行くことは何とも嬉しいことではありませんか<sup>(2)</sup>。

ヘボン以外の宣教師も家庭集会を開いて伝道した。さらには、「キリスト教講義所」と呼ばれる伝道会をも開いた。これは、演説会の形式をもち、当時の自由民権運動と協力して開かれた。新潟の集会では、600人が集まった。

#### ②文書伝道

ヘボンはローマ字を創作した。また、『和英語林集成』という和英辞典を編集し、聖書の日本語訳も手掛けた。

宣教師の下で、聖書売捌人が全国を行脚して、聖書売りながら伝道した。また、ヘボンが作成した『十字架ものがたり』というトラクトも配布した。このように、日本語による様々な文書が使用されたことがわかる。

#### 2. 宣教の結果

明治初期において来日した宣教師は、主にカルヴィニズム神学にたつ者であった。この神学においては、神中心の世界をつくることをその目標にしている。また、J.F. バウズによれば、彼らピューリタンの宣教師がよってたつニューイングランド神学の特徴は、個人的な回心の強調、聖書に対する絶対的な信仰、道徳的な厳格さと伝道心の強調にあった<sup>(3)</sup>。

明治初期の宣教師による働きは、第1に、そのほとんどが信徒による伝道であった。ヘボンは自費で来日

した医者であった。クラークやジェームズは教師であった。その結果、第2に、宣教師は一般的の学問にも優れており、市民的自由の気風と精神をも教えた。いわば彼らは、キリストの教えだけでなく西欧文明をももたらす者であった。第3に、宣教師は、幕末から明治維新にかけて日本人の洋学志向を十分に満たす者でもあった。概して、カトリックの宣教師はフランス語とその文化を、プロテスタントの宣教師は英語とその文化とを、日本にもたらしたといえることができる。

彼らの宣教活動の結果は、キリスト教禁令の時期と重なっていたために、めざましい成果をあげることはなかった。しかし、後の宣教の備えを築いたものとして意義があったといえる。それは、バプテスマのヨハネ的な働きであったといえよう。

#### B. 横浜、熊本、札幌バンドの宣教

宣教師たちの宣教活動のもう一つの結果が、諸バンドの形成であった。

J.H. バラは、オランダ改革派の宣教師として、ラトガース大学卒業の後、1871年来日した。彼は塾を開き、その塾生が横浜の外国人の祈禱会にも出席した。この祈禱会においてバラは使徒行伝の講義をした。この時にリバイバルが起きた。そして、9人の日本人学生が洗礼を決意した。

翌年3月に、日本で最初のプロテスタント教会が設立された。翌1873年には会員が20名になり、礼拝参加者は50名に増加した。翌年には62名になり、日本基督公会が組織された。これは、会議制であり、教師、長老、執事よりなる長老主義をとる教会であった。その後、活発な伝道が展開されて、教会が形成されていった。これが横浜バンドである。

1871年に熊本洋学校が設立された。これは、青年の洋学教育を目的とするものであった。教師は L.L. ジェームズ (1837~1909年) である。彼は米国の陸軍士官学校を卒業した後、南北戦争に参加した。そして、神信仰に生きる自主的な個人を形成することを目標として来日し、1876年に熊本城下の花岡山で集会を開いた。集まった35名の生徒は、「奉献趣意書」に署名し、日本を神の国にすることを誓った。保守的な熊本にあって、青年たちの盟約による共同体は、すぐに当局の圧迫にあった。熊本洋学校は閉鎖され解体された。彼らは同志社英学校に移った。

札幌バンドは、札幌農学校の教師である W.S. クラーク (1826~1886年) の感化によって開始された。クラークは、アマースト大学とゲッチングン大学に学び、マサチューセッツ農業大学の学長となった。1876年に、官立学校教師として来日した。8ヶ月の英語教師としての滞在期間中に宣教し「イエスを信じる者の誓約」というキリスト教信仰と生活とを内容とする誓約書を作成し、それに日本人学生31名が署名した。

これら3バンド以外に、松江バンドと称されるもの

もあった。これは、B.F. バックストン (1860~1946年) により信仰の訓練を受けて伝道した人たちの群れであった。彼らは、松江において訓練を受けた後に、全国に散って、聖会を開催して活動した。その影響力は3バンドほどではないが、純粋な福音を保持した点において、評価できる<sup>(4)</sup>。

#### 1. 宣教の方法

##### ①信徒のあかし

3バンドに共通する宣教方法は、信徒によるものであったことである。牧師ではなく信徒であった者が、それぞれのバンドの指導者であった。クラークもジェームズも教師であった。そして、宣教活動も信徒である学生や青年たちが展開していった。札幌バンドでは学生たちが独自の教会を設立するまでに至っている。

3バンドの信仰は、ピューリタンの自由な精神と個人主義的な信仰であった。札幌バンドは、1832年に札幌独立教会を形成した。これは、どの既成の教派にも属さない独立した教会であった。「イエスを信じる者の誓約」は信仰告白であるが、それには教会論が記されていない。熊本バンドは、教会を形成せず、組織化しなかった。その点では、札幌バンドと同様に個人主義的な信仰であったといえる。

一方、横浜バンドだけは、教会形成を内容とする教会論をもち、組織化を行ない、伝統的なキリスト教会を形成した。

##### ②集会伝道形式

どのバンドも集会形式の宣教を取り入れている。札幌バンドでは、信徒たちで集会を運営し、友人をそこに招いて宣教した。横浜バンドでは、教会における集会に学生をさそうというかたちで宣教した。

表4 3バンドの比較

	横浜バンド	熊本バンド	札幌バンド
指導者	宣教師	信徒	信徒
参加者	学生	学生	学生
教会形成	あり	なし	あり
政治意識	あり	大いにあり	あり
全体的傾向	教会中心	国家主義的	個人主義的
結末	正統的の神学をかかげる日本基督公会の形成	解体されて同志社英学校へ移籍	札幌独立教会設立後に無教会運動に継承

#### 2. 宣教の結果

外国人宣教師や教師の唱えるキリスト教に、なぜ多くの青年層が入信していったのであろうか。

第1に、キリスト教の教えに説得力があったことが考えられる。唯一の神を信じるキリスト教は合理的であった。また、父や母を敬うことや、生きるも死ぬも神のためという教えは、日本の伝統的倫理に共通する

ものであった。したがって無理なく彼らに受け入れられたと考えられる。

第2に、宣教師の優れた人格への傾倒をあげることができる。米国から来た宣教師は、教養が豊かで人格者であった。日本人はその人の人格を見て真実を判断する傾向をもつ。その点、彼らが人格者であったために、青年層からの尊敬を獲得したといえる。

第3に、歴史的に見ると、江戸時代から明治時代という大きな変化の時期にあつて、かつての武士階級が、新しい生活倫理を求めていたことがあげられる。家禄を失い、商売に失敗した士族の挫折感が、新しい精神としてのキリスト教を求める青年層の背景に存在していた。そして、新しい合理的なキリスト教によって、新しい国家を建設しようとする意欲が彼らに与えられたと考えられる。

3バンドの結末は、互いに異なる。熊本バンドは解体された。横浜バンドは教会形成を結果とした。そして、札幌バンドは、1882年に札幌独立教会を信徒の力で形成したが、その大半は無教会運動へ大きく影響を与えていったと考えられる。(表4を参照)

一般民衆の中ではなく、主に学生や知識人の中に実を結んでいったのがバンドによる宣教の限界である。

### C. リバイバル

1883年から翌年にかけて「リバイバル」が起きた。これは、横浜海岸教会の祈禱会において、バラが夢を告白したことに始まる<sup>(5)</sup>。バラは夢を見て、伝道者としての責任感に打たれ、悔い改めを告白した。これがリバイバルの起点となり、神学校や諸教会に広がっていった。このリバイバルは、明治時代のこれまでのキリスト教宣教の集大成ともみなされる事件であった。

#### 1. 宣教の方法

##### ①集会伝道方式

リバイバルは、集会を中心に広がっていった。特に第3回日本基督信徒大親睦会は、心神喪失や錯乱状態をとまなうほどに、興奮に満ちた集会であった。

この会に出席した内村鑑三は、以下のように述べている。

誰もかれも泣いた。かかる場合に泣き得ぬ者は「人でなし」だと思われた。幾つかの奇跡的な回心談も報告された。非常な霊の力を授けられたあるミッションスクールの少年たちは、路上でみずぼらしい行脚僧をとらえ、彼を相手に祈り、議論し、ついにその袈裟をはぎ取って、イエスを救い主として信ぜよと強請したという。また、どもりとして知られていたある青年は、そのなわ目を解かれて、使徒ペテロのように、火と燃えながら自由に説教したという……われわれの上に、何か、奇跡的な、驚くべき事が起こりつつあることを、一同は感得した。われわれは、太陽がなお頭上に輝きつつづけているかをさえ

も怪しんだ<sup>(6)</sup>。

集会においては、信徒のあかしや、いやしなどの奇跡がなされたことがわかる。また、信徒が個人伝道をしていたこともわかる。

##### ②伝道旅行

1883年に、横浜における祈禱会に発したりバイバルは、東京と横浜の諸教会、諸キリスト教主義学校におよんだ。そして、さらに、大親睦会を契機として、群馬、神戸、大阪、仙台にも広がっていった。

1884年3月、京都の同志社での祈禱会がさらなる発端となり、同志社の学生が、京阪神、四国、中国、そして東京、群馬、仙台へと旅行して宣教していった。

いずれも、教会における集会が、宣教の拠点であった。

#### 2. 宣教の結果

1882年の信徒数は、4367人であった。しかし、リバイバルにより、1885年には10775人と倍増した。数においては、飛躍的な前進である。

リバイバルの積極的意義としては、罪の自覚が鮮明になり、回心の事実が内面化・個人化したこと、キリスト教を贖罪信仰として受け取り直す作業が、ひとりひとりに促されたこと、信徒による伝道活動により教職者中心の活動に新しい力を注ぎ入れたこと、などがあげられる。

しかし、内村鑑三は、これを「教会は復興し、良心は試みられ、愛と一致とは著しく強められた。その全体の性格が実にペンテコステ的であった<sup>(6)</sup>」と肯定的に評価しているが、一方、「感傷的」なキリスト者が増加したこと、また、自分にとっては何も変わらなかったことを、以下のように記している。

しかし、ああ！「なんじの罪ゆるされたり」との喜ばしい声は、ついに私の肉の鼓膜にも、心の鼓膜にも、霊の鼓膜にもとらえられなかった。三日間にわたり、苦悶し続け、胸を打ち続けた後、私はやっぱり前と同じ墮落の子であった。特別な天の恵みを受けた自分、希望と歓喜とにあふれた自分を、同信のクリスチャンの前に示すという、この上もなくうらやましい特権は、ついに私には許されなかったのである。私の失望は実に大きかった。この「リバイバル」現象を、精神電気現象に基づく催眠術の一種と説明し去るべきか、あるいはこの身の罪の深さがそれに対する不感受性の真因なのか<sup>(7)</sup>。

このリバイバルは、教会の集会を中心に各地に広がり、多くの人々に信仰の決心を促した。しかし、その階層には学生や知識人、都市中産層という、比較的個人主義の傾向が強い社会層に見られる。また、リバイバルは、伝統的に共同体意識の強い農村部には広がら

なかった。ここに、その限界があったとすることができる。

#### 第4節 明治後期における宣教

1889年に大日本国憲法が公布され、天皇の絶対的権威が確立した。翌年には教育勅語が公布され皇国思想が徹底されることになった。1891年には、内村鑑三の不敬事件が起きた。

このように台頭しつつあった天皇制に対して、キリスト教会は大別して三つの態度をとった。

第1の態度は、妥協的立場であった。勅語等への敬礼は、外的形式にすぎず、礼拝ではない。したがってキリスト者の信仰上の主張に何らの支障もない、というのがこの立場であった。組合教会の金森通倫、横井時雄がこの立場をとった。

第2の態度は、合理的立場である。勅語への礼拝が宗教的礼拝であり天皇を神とする礼拝であるならば、キリスト者は死をもってそれに抵抗しなければならないが、国家が明確な基準を示すことを要求してそれにより判断するという立場がこれである。押川方義や自由主義神学がこの立場である。

第3の態度は、抵抗型である。キリスト者はキリストの像にさえ礼拝すべきでなく、ましてや勅語や天皇を礼拝してはならないとする立場である。内村鑑三、柏木義円、植村正久はこの立場である。

明治後期において、国家主義の台頭により教会は圧迫を受けたが、教会内部にも二つの問題があった。一つは神学の問題であった。自由主義神学が導入されて福音的信仰に破壊的影響を与えた。植村正久と海老名弾正との間のキリスト論を巡る論争は、この象徴といえる事件であった。

もう一つの問題は、教会の合同問題であった。日本基督一致教会と日本組合基督教会とが合同をめざしたが、失敗に終わった。教会政治の基本的な違い、組合教会のアメリカンボードからの反対、十分討議されなかったこと、などが失敗の原因だと考えられる。

この時期における宣教を、植民地伝道と大挙伝道と自給独立伝道と取りあげて考察する。

##### A. 宣教の方法

###### 1. 植民地伝道

日清戦争に勝利し、台湾が日本の新たな領土になった。そこで植民地伝道が開始された。これは戦争の付帯事業であり、純粋な宣教とは異なり、国策的性格があることが指摘される。(詳細は次章において扱う。)

###### 2. 大挙伝道

1900年開催の日本福音同盟第十回大会において、大挙伝道の計画が決議された。これは、20世紀大挙伝道と呼ばれる超教派による組織伝道計画であった。欧米においては、19世紀から20世紀に移行するのを記念にして、信徒の霊的覚醒を推進するものとして実施され

た。日本では、新しい信徒を獲得することに目標が置かれた。

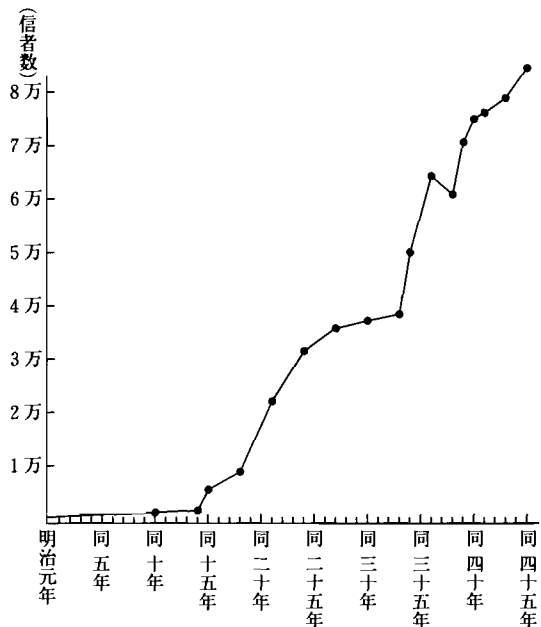
大挙伝道計画の決議は、同年4月25日になされ、それを受けて、諸教会における準備、伝道者の派遣、目標献金額、実行委員なども決議された。

2月10日、福音同盟会長の本多庸一が、旧約聖書のゼカリヤ書4章6節「権力によらず、能力によらず、わたしの霊によって」をこの運動の標語とし、それに基づく説教を行った。以後、全国各地において大挙伝道計画が実施されていった。

大挙伝道では、まず各地の諸教会において準備祈禱会がもたれた。その後、伝道演説会が諸教会によって開催された。伝道演説会は、有力説教者が行った。海老名弾正やバックストンも演説会において説教した。主な会場は公会堂であった。また、演説会と並行して、信徒により案内書の配布、家庭訪問が行われた。

大挙伝道は、当初においては盛り上がりを欠いており、停滞気味であった。しかし、ペンテコステの日、東京の京橋区内の諸教会において高揚し、この成果が全国に報道され、横浜、大阪、神戸へと各地に影響を与えた。そして、2年間において約2万人の求道者を獲得するという結果になった。実際、日本のプロテスタント人口は、20世紀にはいって5万人を超え、信徒数の全人口に対する割合が、0.1%を超えるようになった。(表5を参照)

表5 明治年間プロテスタント信徒数の変遷



工藤栄一『近代日本社会思想史研究』教文館、1989年、97頁。

しかし、大挙伝道は、学校教師や学生、実業家などの都市部の知的階層および中産階級を中心としたものであった。全社会層に影響を与えたものではなく、次代の信徒指導者を獲得したことによってその意義があったと考えられる<sup>9)</sup>。

### 3. 自給独立伝道

明治初期に設立されたプロテスタント教会は、長老派ミッションやアメリカンボードなどの欧米の宣教団体から指導され、また財政的にも援助されていた。

1877年、沢山保羅牧師の浪花教会は、信徒数15名で日本最初の自給独立教会になった。信徒は什一献金によって教会財政を支えた。

沢山の自給論は以下の内容である。「イエスキリストによって救われた者にとって、すべては神からの賜物である。その賜物は、神のために用いなければならない。教会の経済的独立は、この世からの独立であり、信仰を深め、教会全体に一致と協力の精神を育てる。貧しい中から献金することにより、霊性は向上する。」

教会の自給独立運動は、国内のナショナリズムの高揚とともに強化されていった。そして、1896年には日本組合基督教会が自給を達成した。また、1905年には日本基督教会が、2年後に各個教会が自給独立を達成することを大会において決議した。

このようにして、明治後期において教会の自給独立が達成されていった。その背景には、欧米の教会の財政的危機があった。

#### B. 宣教の結果

国家による教会への圧迫がしだいに強化されようとしていたこの時期において、大挙伝道は、一応の成功をおさめたと評価することができる。超教派の宣教方法が実を結んだ。しかし、都市中心に実行されたために、運動が市民層に限定した点が問題であった。都市の知的階層が、いわば教養の一部としてキリスト教を受け入れた性格が強いといえる。一般民衆をまきこむ運動として決して展開しなかった。そこに大挙伝道の限界があったといえる。

植民地伝道は、国策の一環としての性格が強いため、宣教運動と呼ぶことはできない。

自給独立運動は、国内の教会が海外からの財政依存から独立するという教会内部の運動であった。したがって、これを宣教運動とみなすことはできない。

## 第5節 結論

復活キリシタンに始まり、リバイバルで終わる明治時代の宣教運動について、以下を結論として指摘することができる。

1. カトリック教会では、訓練された宣教師が日本に派遣されて、貧民救済活動に従事しながら、宣教した。宣教師は、天幕集会を開催する巡回宣教を行ない、修道会も組織されて、慈善活動と宣教にあたった。その結果、社会の中下層部に受け入れられた。
2. 正教会では、いち早く、聖書を日本語に訳し、訓練された宣教師と伝教師による文書伝道と集会方式伝道が積極的に実施された。その結果、特に地方において著しい成功をおさめた。しかし、日露戦争以

後は時代状況のために、強勢は急速に弱まった。

3. プロテスタント教会では、宣教師と信徒が日本の学校の教師として、学生に宣教した。その結果、主に都市部の学生と知識人に受け入れられた。集会伝道方式、文書伝道が採用され、後期には、日本人学生による伝道旅行も実施された。しかし、受け入れられたのは、都市知識人や学生であり、地方の農民層には宣教の効果はほとんどなかった。
4. 明治後期に国家主義が強化されると、宣教活動は弱まった。植民地伝道という国家に迎合した宣教は実を結ばなかった。自給独立伝道は、教会内部の経済的独立をめざす運動であり、宣教と直接の関係はなかった。超教派による大挙伝道では、ある程度の成功があった。

## 注

- (1) 1898年の内務省の調査によれば、日本のキリスト教徒数は以下の通りであった。

	教会数	信徒数
組合教会	70	13627
聖公会	95	8237
日本基督教会	67	12441
メソジスト教会	78	5177
カトリック教会	208	53924
正教会	170	25231

〔正教新報〕482号（1901年1月）

- (2) 『ヘボン書簡集』318～319頁。
- (3) J.F. ハウズ『日本における近代化の問題』を参照。
- (4) 松江バンドに関しては、以下を参照。都田恒太郎『バックストンとその弟子たち』バックストン聖会、1968年。
- (5) バラが見たと夢の内容は、以下の通りである。「ある断崖絶壁の頂きに、羊の群れが居た。それはみるからに危険千万で、一歩あやまれば、千尋の谷底に転ろび落ちさうなのだ。然るに羊は楽しさうにむれていて、一匹も落ちない。ハテ不思議のこととみてやれば、天の一方より赫灼たる光明の放射されて、それら群羊の上を遍く照らして居たからである。左るにても牧羊者は、何処に、又何事をして居るにやとみてやれば、こはそもいかに、群羊よりは、遙かかけ離れたる彼方に、杖を放下して、心地よげに昼寝を貪り熟睡していた」〔植村正久と其の次代〕2巻、548～549頁。
- (6) 『内村鑑三信仰著作全集』2巻、64頁。
- (7) 同。
- (8) 同、65頁。
- (9) 工藤栄一は、大挙伝道の成果を分析した結果、その宣教方法が、日本の教会において踏襲されていった点を重要視している。さらに、大挙伝道の性格について、「20世紀における日本のキリスト教の知識人的、中産階級的性格は、ここでいっそう明確となったのである」と述べている。工藤栄一『近代日本社会思想史研究』（教文館 1989年）98、103頁。
- (10) 『植村正久と其の次代』2巻、246～254頁。

\* 一般的時代状況を描写するために使用した文献は、最終章において参考文献として掲げる。

（平成14年9月9日受理）